(昭和36年12月8日第三種郵便物認可)　毎月15日発行（定価10円）　第228号

立教大學新聞

発行所
豊島区池袋三丁目
立教大学新聞学会
振替東京 70852
電話(983)0111(代)内線688
発行人　野口定男
毎月十五日発行

出版と印刷
株式会社 表現社
板橋区富士見町三四
電話（九六二）二三九一（代）

拡散するエネルギー

米原潜ついに入港!!

・米原潜寄港阻止闘争は、一二月七日（土）の横須賀における学生の流血という惨事を引きおこしたが、それにもかかわらず、二日、ついに米原潜、シー・ドラゴン号が九州、佐世保港に入港した。ここ数日、原潜反対闘争は、社、共両党、学生などによって一定程度の高揚を示したが、なぜ、入港を阻止できなかったのか原潜の横須賀入港が近日中に予定されている現時点で総括しておく必要がある。原潜の入港を許したという事態はとりもなおさず、原潜寄港阻止に立ち上がった、労働者、学生のエネルギーを有効に組織しえなかった既成左翼と、分裂状態にある学生運動の現在的状況を鮮やかに浮びあがらせているのであるが、学生戦線においては、佐世保現地、東京、関西を中心に過酷な闘争を展開した。

11・7 学生八四名が重軽傷

横須賀闘争　基地正門前に座り込む

米原潜、シードラゴン号が、九州・佐世保港に入港した五日前の一一月七日（土）、東日本における原潜入港予定地である神奈川県横須賀市で「原潜阻止全国統一行動横須賀集会」が開かれた。この集会には、社会党、総評傘下の労働者二万名と共に立長学連系を除く約二千名の学生が結集した。当日、横須賀港に面した臨海公園には、午後から労働者、学生が続々と集まり午後二時頃から抗議集会が開いた公園のすみに結集していた学生は主催者とは別個に独自の集会を開いていたが、午後四時ごろ各労組の最後部についてデモ行進に移った。学生のデモ隊は公園を出るとジグザグ行進。米軍基地の正門前に向ったが、正門前には鉄柵が並べられその上には有刺鉄線が張りめぐらされており、その奥には警察のトラック五台等で頑丈なバリケードが築かれ、金網つきの鉄カブトに青い乱闘服で武装した八百名ほどの警官が警棒を抜いて待機していた。午後四時半ごろ学生のデモ隊が、原潜反対を叫びながら正門前に到着、激しくジグザグ行進を続けた。峡い正門前は社青同の労働者、それに学生でうずめられた。その時、正門前に待機していた警官が、一勢に学生におそいかかり、学生を反対側の歩道に押し上げようとした。身動きのできない学生は大混乱に落ち入り、五〇名ばかりが待機たおしとなった。警官の警棒を避けようとしてプラカードがまい、石がとんだ。路上の押したおされた女子学生の助けを求める声が、怒号の中にとびいった。一度押しもされた学生は再び隊列を整え正門前へ。警官が少し後退した。その直後、「わー」という喚声とともに無防備の学生めがけて警棒の雨が降りかかった。逃げまどう学生めがけて、横の方から警棒を振りかざした警官が突こんで来た。ちょうどに後退した学生と警官の間に空間ができたが、そこに学生数人が倒れており、顔を血で真赤に染めた学生が立っていたその学生めがけて警官が数人とびかかり、基地の奥へとうり去った。気絶したのかぐったりとした男子学生に抱れて隊列から離れる女子学生もいた。十分後、学生は再後隊列を整え正門前に結集、座り込みを開始した。学生と警官の間にするどいにらみ合いが続いた。この時、後方にいた社青同の労働者、二〇名ばかりがウイショっと学生と警官の間に割って入り、そのまま最前列に座り込んだ。学生の間から一勢に拍手が起きた。座り込みを開始して約四〇分後の五時半、学生は立ち上がり夜の部の闘争にそなえるために臨海公園にもどった。午後七時、学生は再び正門前に集まり気勢を上げた。

この日二度の闘争で、双方に二三五名の負傷者を出したが、学生の負傷者に頭部に多かったのは、警棒によるもので、これは安保闘争以来のことであるまた、学生三三人が神奈川県警によって検挙された。以上のような事実に見られるように、最近、警官の弾圧が急に激化していることは、注目にあたいする。

当日の統一行動は、指導部の指揮系統がまったく貧弱であったこと、それに加えてデモ隊を上まわる警官が出動したことなどで、きわめて低調なものに終った。しかし、それにもまして、学生戦線における原潜闘争のたち遅れを痛切に感じさせるものがあった。米原潜の横須賀入港を目中にひかえ、また警官の弾圧が厳しさを加えている現在、このたち遅れをいかに早急に挽回するか、きわめて深刻な状況を呈している。

11・19 清水谷に二千名

立ち遅れ示す学生戦線

シードラゴン号の佐世保港入港一号の横須賀寄港が近日中に予定されているにもかかわらず、寄港阻止闘争は尻つぼみの形勢を見せている一一月一九日（木）、原潜寄港阻止の学生統一行動が千代田区清水谷公園に約三千名の学生を集めて行なわれた。これは「原潜寄港阻止共闘会議（平民学連、民青は入っていない）が主催したもの。午後一時ごろから清水谷公園には中大、早大などの学生がつめかけたが、早大、法大などが大学祭の最中であるという事情もあって、学生の動員は予想より少なかった午後四時ごろ中大を先頭に外務省に向けて抗議デモに移った。デモ隊は、赤坂見附—溜池と十二列の隊列でジグザグ行進。しかし、途中からデモ隊の両側には鉄カブトに乱闘服で身を固めた警官がびったりつきそい、そのためデモはまったくのサンドウィッチデモとなった。外務省に近づくにしたがって警官の数は増え、路上には学生の座り込みを暴害するために水がまかれていた。外務省と日比谷公園に分れる交叉点の外務省側の道は警視庁の装行車と武装警官で完全に遮断されており、とても破れそうにもない。学生側はそのまま座り込もうとしたが、車道側の警官が一気に学生を歩道に押し上げてしまい、どうするとも出来ない学生はずるずると日比谷公園に押し込まれた。その後学生は噴水前結集、当日の総括集会を開いて午後六時過ぎ解散した。なお当日、本学からは十六名が参加した。

文化会新執行部決まる

委員長　川妻干将君（経二国情）
副委員長　藤田　一君（法二ホテ研）

昭和四十年度の文化会執行部の改選があってから十月十日に、キャプ・マネ会議が開かれた。常任委員には若干の欠員補充したが、信任投票が行われ結果、川妻干将君（経二、信任三二、不信任六、無効四）藤田一君（法二、信任三三、不信任三、無効二）の二名が信任され常任委員に決定したが、津田鷹文君（信任二四、不信任二、無効三）藤井直機君（信任三三、不信任十一、無効四）はいずれも有効投票数三八のうち信任票が三分の二の二六票に満たなかったため不信任となった。ひき続いて翌二八日のキャプ・マネ会議では委員長、副委員長の選出が行なわれ、始めに委員長に立候補した川妻君が立候補演説を行った。内容は以下略し合い を基本とする文化会本部の民主化、同本部と各サークルの結びつきの為のキャプ・マネ会議の強化、同立大文化祭、立大うたごえ祭典の充実、四新入生対策の改善同立教祭の発展、内学館、生協の強力な運動の展開にあげられたもので、立教における文化運動の推進を主としたものであった。続いて学館問題やその他二、三問題についての質疑に答えられた。そしてこの後この議題に参加したサークル数四五そのうち有効投票数は三九、不信任投票が行われ、信任三八、不信任七との結果、四十年度の文化会新執行部の委員長に川妻干将君（経二）、副委員長に藤田一君（法二ホテ研）が決定した。

この後、副委員長の選出に移り立候補者の藤田君が立候補演説を行った。ここでも学館問題が述べられ、学校側や学生の態度から判断してこの運動が全般的に遅くなったという情勢分析があり、また現在の文化情況の低迷の中で立教祭を文化運動の一起点としたいという意欲がのべられ、具体案としては同本部とサークルの密接な関係、同各サークルの問題を本部を中心化委員長に藤田君が決定した。

原潜闘争学内でも盛ん

三〇団体が反対声明

米原子力潜水艦の日本寄港に反対する気運は、学内でも相当の盛り上りを見せている。原潜寄港の学内集会は十一月六、九、十二、十三日と相次いで四回、各々約二百名の学生の参加の下に行われたが、参加者数は回を追う毎に増加してきている。なお、十一月二十日現在、次の三十団体から反対声明文が出されている。

立教大学経済学部教授団
般委員会本部、学館準備委
文化会本部、文化会C・M会議
大学院経済学部自治会
経済学部ゼミ連絡行部
社会科学研究会
史学研究会
経営学研究会
国際情勢研究会
立天センツルメント
社会福祉研究会
放送研究会、立天平和委員会
部落問題研究会、学生便保
中国研究会、長野県人会有志
逆井ゼミ、その他二団体

訂正

本紙三七号（十月三十一日発行）一面の理学部町田茂教授による「北京シンポジウム」の編集部によるリードにミスがありましたので訂正いたします。「依頼原稿をうけた」→「依頼稿をお願いした」筆者町田教授には迷惑をおかけしましたので、深くおわび致します。

論説　文化会新執行部に望む

＝早急に活動方針案の提示を＝

去る十二月八日、午後三時より三五一番教室に約五十名の参加のもとにキャプ・マネ会議が行なわれ文化会の委員長、副委員長が圧倒的多数の信認のもとに選出された。

（選挙過程は一面の記事参照）原子力潜水艦寄港、憲法改悪、一般的に池田内閣より反動的であるとされる佐藤新内閣の成立、等々という緊迫した国内情勢、中国核実験、フルシチョフの追放、イギリスにおける労働党内閣の成立等に象徴的になられる流動化しつつある国際情勢、文化運動の停滞、混迷という文化情況の中で、立教大学における文化運動の指導者としての新執行部に課せられた任務は、重大である。

× × ×

私たちはなにからもまず新執行部にたいして、文化運動理論およびサークル論を確立し、それらと情況を交叉させた地点に活動方針案を早急に作成し、私たちサークル員の前に提示することを要求したい。

キャップ・マネ会議において新執行部は同学館運動に主体的に取りくんでいく、同文化会本部と各サークルの結びつきを強固なものにするためキャップ・マネ会議の強化、同来年の立教祭を反省的に検討し より良いものにしたい、同立大歌声祭典の充実等々と一連の運動屋」気取りをまる出しにして若干の活動方針を大衆的にあきらかにしたが、おどろいたことにこれから一年、立教における文化運動を指導していこうとする者が、「文化とは何か」「文化運動とは何か」「現在におけるサークル活動の問題点は何か」「サークル活動における思想的立脚点は何か」等々というまさに文化運動を指導する位置にあるものがさけて通ることのできない根源的な点に関する内在的な追求は全無であった。私たちはこれ等の諸点に関する追求を一切捨象して構築された活動方針は無意味であるのみならずかえってサークル活動にとっては有害ですらあると考える。観念的に把握されている文化理論・政治理論の各サークルへの一方的な流し込み方式はサークル活動の形骸化をもたらすのみならず、サークル活動が本来的に持つべきはずである創造性をも抹殺してしまうという結果をきずり出すであろう。

現在、文化運動にとって必要なのは決して景気よくラッパを吹き鳴らすことではなく、現在の停滞した文化情況を直視し、ぶざまな格好で悪戦苦闘して、かかる情況からなぜに現出し、いかにして革命的転換するのかという点にたいして主体的に追求することであるということを新執行部は知らなければならない。

そのために第一には安保闘争以降の思想情況、とくに現在、政府ブルジョアジーがマスメデアの下層動員によって強力に展開しているイデオロギー攻勢の分析、具体的には私たちがさけることが出来ないものとしてつきつけられている近代化論・福祉国家論・大国主義論・大東亜戦争肯定論等々の「イデオロギー」との思想的対決、およびなにゆえに現在かかるイデオロギー攻勢が展開されるか、つまりそれらの思想的背景に対する内在的な追求、第二に安保以降の拡散する思想情況の中で顕在化し「意識的」な学生によって落号されるわたし「一般」学生の「安定、頽廃ムード」への埋没つまり学生層における意識の変動の分析、それからひきずり出される結論にたいして指導者はいかに対処していき、いかなる方針を打ち出していくのかという点に関する追求、第三に文化・政治運動理論の混乱という情況のもとで借りものでないおのれ自らの文化・政治理論の確立が必須の課題であると考える。

× × ×

さらにまた新執行部は文化会本部と各サークルとの結びつきがいかに現在、稀薄であるかということも痛苦なものとして知らなければならない。

立教大学におけるサークル活動の集約的表現の場である立教祭において、立教祭実行委員会・文化会本部より各サークルに一方的に流し込まれた今年の「呼びおこす民族の心を……」というスローガンがなぜ現実的な意味なのであり、各サークルにおいては全然かえりみられなかったという事実は一体何を意味するか？某サークル員は「まったくこのサークルはスローガンには全然興味がないのではないか。おそらく、スローガンに題成したのは反対すると予算がけずられるからであろう」とまで公然と極言しているのである。「呼び起そう民族の心を……」という今年の立教祭のスローガンが各サークル内部において徹底的な討論を行なった結果、圧倒的な支持を獲得したのではなかったという事実を新執行部は肝に銘じなければならないであろう。

ここにおいて私たちは新執行部にたいして、各サークルから嘲笑されたところで自分達のみに通用する原理的サークルを無意味にクルクルまわし、それを各サークルに無媒介的に流し込んだ過去の誤謬を、度々かえさないよう切望したい。新執行部はまず各サークルのところにおりて来て、そこで各サークルがかち当っている問題をおのれ自らの問題としてとらえかえし、一緒に苦闘し、そこから何かをひきずり出さなければならない。文化会執行部という位置をおのれ自らが自覚している文化・政治理論の各サークルへの流し込み、宣伝の手段などと考えてはならない。

× × ×

安保闘争以降四年間、反体制陣営の分裂した情況は、一方においては、すでにのりこえられた既成理論へ埋没し、それを「聖書」としておがめ無意味にオオム返しする部分を前出したが他方においては既成理論そのものをすべて撤制のものとし、その根底的な転倒、さらに新たな政治・文化理論の創出という苦しい作業を自らの任務として、その患者を一点に凝結させ、内在的に掘りさげていくという作業を行う一定の識級的部分をも生みだしたのも厳固たる事実なのだ。かたや「情況」の変動とともにそれに単細胞的に反応し、カメレオンのごとくいろいろう動きまわる「運動屋」であり他方は、まさに現在の反体制陣営の分裂という情況、擬制的にしろ侵透する「安定・頽廃ムード」という情況の中で、絶対的なる理論的メンを、泥にまみれて、獲得しようと模索している部分である。両者はましわることなく、その違いは歴然として存在する。

新執行部は、現在、壁にぶち当っている学館運動に対して積極的にその運動を行なっていくというポーズを示したので若干の提言をなしておきたい。まず新執行部は従来一貫して行なわれてきた各サークルの「部室がほしい」という即自的要求への便乗という事実を反省的に検討し、運動主体の強化をはからなければならないであろう。とりわけ学校側の「学館案」が御協活動の場としてのサークル活動の疎開的活動におしこめ学生の厚生補導に力点をおいた大づくり政策の一環たらしめるものであるということを大衆的にあばき出し、学校側の「学館案」に対抗できる学生側のプランを早急に作り、学校側と私たち学生に積極的提示していくことが必要である。よりや学館運動をおのれ自らの党派的利害の賈獄場・基地闘争に私たち学生を狩り立てるための手段などと考えてはならない。

・メデアの下層動員によって強力に展開しているイデオロギー攻勢の分析、具体的には私たちがさけることが出来ないものとしてつきつけられている近代化論・福祉国家論・大国主義論・大東亜戦争肯定論等々の「イデオロギー」との思想的対決、およびなにゆえに現在かかるイデオロギー攻勢が展開されるか、つまりそれらの思想的背景に対する内在的な追求、第二に安保以降の拡散する思想情況の中で顕在化し「意識的」な学生によって落号される私たち「一般」学生の「安定、頽廃ムード」への埋没つまり学生層における意識の変動の分析、それからひきずり出される結論にたいして指導者はいかに対処していき、いかなる方針を打ち出していくのかという点に関する追求、第三に文化・政治運動理論の混乱という情況のもとで借りものでないおのれ自らの文化・政治理論の確立が必須の課題であると考える。

× × ×

さらにまた新執行部は文化会本部と各サークルとの結びつきがいかに現在、稀薄であるかということも痛苦なものとして知らなければならない。

立教大学におけるサークル活動の集約的表現の場である立教祭において、立教祭実行委員会・文化会本部より各サークルに一方的に流し込まれた今年の「呼びおこす民族の心を……」というスローガンがなぜ現実的な意味なのであり、各サークルにおいては全然かえりみられなかったという事実は一体何を意味するか？某サークル員は「まったくこのサークルはスローガンには全然興味がないのではないか。おそらく、スローガンに題成したのは反対すると予算がけずられるからであろう」とまで公然と極言しているのである。「呼び起そう民族の心を……」という今年の立教祭のスローガンが各サークル内部において徹底的な討論を行なった結果、圧倒的な支持を獲得したのではなかったという事実を新執行部は肝に銘じなければならないであろう。

ここにおいて私たちは新執行部にたいして、各サークルから嘲笑されたところで自分達のみに通用する原理的サークルを無意味にクルクルまわし、それを各サークルに無媒介的に流し込んだ過去の誤謬を、度々かえさないよう切望したい。新執行部はまず各サークルのところにおりて来て、そこで各サークルがかち当っている問題をおのれ自らの問題としてとらえかえし、一緒に苦闘し、そこから何かをひきずり出さなければならない。文化会執行部という位置をおのれ自らが自覚している文化・政治理論の各サークルへの流し込み、宣伝の手段などと考えてはならない。

そのために第一には安保闘争以降の思想情況、とくに現在、政府ブルジョアジーがマスメデアの下層動員によって強力に展開しているイデオロギー攻勢の分析、具体的には私たちがさけることが出来ないものとしてつきつけられている近代化論・福祉国家論・大国主義論・大東亜戦争肯定論等々の「イデオロギー」との思想的対決、およびなにゆえに現在かかるイデオロギー攻勢が展開されるか、つまりそれらの思想的背景に対する内在的な追求、第二に安保以降の拡散する思想情況の中で顕在化し「意識的」な学生によって落号される私たち「一般」学生の「安定、頽廃ムード」への埋没つまり学生層における意識の変動の分析、それからひきずり出される結論にたいして指導者はいかに対処していき、いかなる方針を打ち出していくのかという点に関する追求、第三に文化・政治運動理論の混乱という情況のもとで借りものでないおのれ自らの文化・政治理論の確立が必須の課題であると考える。

× × ×

さらにまた新執行部は文化会本部と各サークルとの結びつきがいかに現在、稀薄であるかということも痛苦なものとして知らなければならない。

立教大学におけるサークル活動の集約的表現の場である立教祭において、立教祭実行委員会・文化会本部より各サークルに一方的に流し込まれた今年の「呼びおこす民族の心を……」というスローガンがなぜ現実的な意味なのであり、各サークルにおいては全然かえりみられなかったという事実は一体何を意味するか？某サークル員は「まったくこのサークルはスローガンには全然興味がないのではないか。おそらく、スローガンに題成したのは反対すると予算がけずられるからであろう」とまで公然と極言しているのである。「呼び起そう民族の心を……」という今年の立教祭のスローガンが各サークル内部において徹底的な討論を行なった結果、圧倒的な支持を獲得したのではなかったという事実を新執行部は肝に銘じなければならないであろう。

ここにおいて私たちは新執行部にたいして、各サークルから嘲笑されたところで自分達のみに通用する原理的サークルを無意味にクルクルまわし、それを各サークルに無媒介的に流し込んだ過去の誤謬を、度々かえさないよう切望したい。新執行部はまず各サークルのところにおりて来て、そこで各サークルがかち当っている問題をおのれ自らの問題としてとらえかえし、一緒に苦闘し、そこから何かをひきずり出さなければならない。文化会執行部という位置をおのれ自らが自覚している文化・政治理論の各サークルへの流し込み、宣伝の手段などと考えてはならない。

そのために第一には安保闘争以降の思想情況、とくに現在、政府ブルジョアジーがマスメデアの下層動員によって強力に展開しているイデオロギー攻勢の分析、具体的には私たちがさけることが出来ないものとしてつきつけられている近代化論・福祉国家論・大国主義論・大東亜戦争肯定論等々の「イデオロギー」との思想的対決、およびなにゆえに現在かかるイデオロギー攻勢が展開されるか、つまりそれらの思想的背景に対する内在的な追求、第二に安保以降の拡散する思想情況の中で顕在化し「意識的」な学生によって落号される私たち「一般」学生の「安定、頽廃ムード」への埋没つまり学生層における意識の変動の分析、それからひきずり出される結論にたいして指導者はいかに対処していき、いかなる方針を打ち出していくのかという点に関する追求、第三に文化・政治運動理論の混乱という情況のもとで借りものでないおのれ自らの文化・政治理論の確立が必須の課題であると考える。

焦点

佐藤政権と原潜闘争

この数ヶ月世界の情勢の変動はかつてなくするどいものがある。フルショフソ連首相の退陣にはじまりアメリカのジョンソン米大統領又イギリスにあっては、労働党の勝利とかつてのケネディ、フルショフ時代の冷戦構造時代は次の者選によってとって代って遂行されつつある。

さてその様な国際情勢の変化と同じ様に国内情勢も緊迫した情況にある。池田—ライシャワー路線と云はれる反動勢力が池田の急変によりウルトラ反動、ウルトラ右翼と云はれる佐藤へとバトンがタッチされた。それは池田の夢みた日本帝国主義の一大飛躍、質的転換が佐藤により一層おし進められ、一般的に「憲法改悪内閣」と云はれる佐藤内閣が憲法を改悪することによりそれを完成するということは十二分に予想される。佐藤にしろ池田にしろそれはバックボーンに金融独占資本がひかえている点でその路線というはいわゆる「自主外交」「寛容と忍耐」「愛情ある政治」と一見民衆路線を保ちながら問題のすりちがえを行い積極外交を送行している。日韓会談、原潜寄港、憲法改悪と云った一連の反動政策の遂行を自らの任務としながら池田内閣はこの問題を何一つ解決しないまま退陣してしまった。それは藤山愛一郎の言葉ではないが池田内閣は安保闘争のしずめ役だったかも知れない。

しかし池田内閣はある意味では池田の退陣は反動勢力の計画性のあったとかも知れない。なぜなら池田によるその様な問題の未解決を退陣ということにより白紙にもどしたかの様な錯覚に我々が落ち入ってしまう。とにかく今度は佐藤により引きつがれたいわゆる佐藤—ジョンソン路線は未解決の問題を積極的に解決して日本帝国主義の早期完成を目ざそうとするものに他ならない。

まず以前から彼らの懸案であった原潜寄港問題が佐藤首相確実と思はれる9月頃になりその動きが急に活発化し、佐藤が首相になると同時に原潜は佐世保に入港した。今後原潜はこの政治方針の一致を機縁しつつ、単一指導部の早急に結成していくことが予まれる。

一方、学生運動の方はというはこの原潜闘争を契機に再び学生運動が大衆運動として蘇生しはじめてきた。しかしながら、内部分裂の克服＝学生運動の全国的統一は何ら具体的な方向性を見い出しえず、むしろ、平民学連による二月全学連再建の動きに見られるように、きわめて悪劣なセクト主義＝分裂の固定化すら生まれているのである。現実の原潜闘争の中でも、平民学連は彼ら以外の学生潮流をトロッキスト、分裂主義者と断罪しつつ、自らは、独自の運動を展開しており、共闘はおろか理論闘争すらも拒否しているのである。他方、平民学連以外の学生潮流は、今だに、この闘争の中においても単一の指導部を創設しておらず、各大学における運動の立ち遅れ、ときまって、孤立して闘争を組まざるを得なくなっている。日本の反体制勢力の中で、学生運動が唯一、重要な一翼として蘇生させる可能性を含んでいるこれらの学生潮流が、原潜闘争の中で、政治方針の一致を機縁しつつ、単一指導部の早急に結成していくことが、今、問われている。

二面よりつづく

X. PP. 134～135）、林氏はやはり、二十一箇条要求が「大事場泥棒の居直り」的なものであり（IX. P. 173）、また、「五族協和」をとなえながらかいらい的な満州国をつくることは、「棍棒で相手の頭をなぐりつけたその手をさし出して」握手を求めるようなものであるということを（X. P. 125）、そして中国「侵略」が「日本の（西洋への）抵抗のマイナス面」であることを（III. P. 120）認めさるをえない。（そうしてこのような「マイナス面」が生じたのか、それが日本の西洋にたいする「抵抗」のあり方とのように関連しているのか、という問題については、林氏は、後進資本主義国であるが故に日本には中国ナショナリズムの「鋭鋒」をさけうるだけの余裕がなかった—すなわち後進国であるが故により侵略的にならざるをえなかった—という趣旨の、林氏にとってはやや不用意な発言—III. PP. 117～118—以外に、なにも言及していない。）

しかしこで、「右翼」の「理想主義」と政府の「現実主義」との分離および戦争の論理の「必然的」自己運動の強調という操作によって、「肯定論」がふたたび強引に展開される。すなわち、「東亜戦争」を構想し推進したのは政府ではなく「理想主義」的な「右翼」であるとしかし政府は一度も政権奪取に成功しえず、「挫折した英雄」として「日陰の存在」にとどまらざるをえなかった（pp. 202～249—日本自体が「百年戦争」で「挫折」したのだから、国内でも「挫折」した「右翼」はいわば二重に「挫折」した「英雄」であり、「非社の美学」の純純な体現者として行なわれてきた各サークルの「部室がほしい」という即自的要求への便乗という事実を反省的に検討し、運動主体の強化をはからなければならないであろう。とりわけ学校側の「学館案」が御協活動の場としてのサークル活動の疎開的活動におしこめ学生の厚生補導に力点をおいた大づくり政策の一環たらしめるものであるということを大衆的にあばき出し、学校側の「学館案」に対抗できる学生側のプランを早急に作り、学校側と私たち学生に積極的提示していくことが必要である。よりや学館運動をおのれ自らの党派的利害の賈獄場・基地闘争に私たち学生を狩り立てるための手段などと考えてはならない。

「啓蒙史学」への反逆と依存

佐藤誠三郎

「歴史の必然性」のなかに解消される。

林氏の「大東亜戦争肯定論」があったがまま」の歴史叙述ではけっして、史実の一方的な取捨選択に基づく強引な「史論」であることを示すために、もはやこれ以上言問を書きつらねる必要はないであろう。それは「歴史の「必然性」をほとんど現実感視に近いまでに強調している点で、また演繹的な推論を史実を無視して強引に展開させている点で、さらに行為者の意図と行為の結果との矛盾にみちた相互関係を恣意的に操作している点において、林氏がはげしく攻撃してやまない「啓蒙史学」の部分と、あまりに類似している。西洋に対抗したようと日本が自己を西洋化してしまったのと同じように、人はその「不倶戴天の敵」とは似てこざるをえないものなのであろうか。

（筆者、さとう・せいざぶろう氏は本学法学部講師、日本政治史専攻）

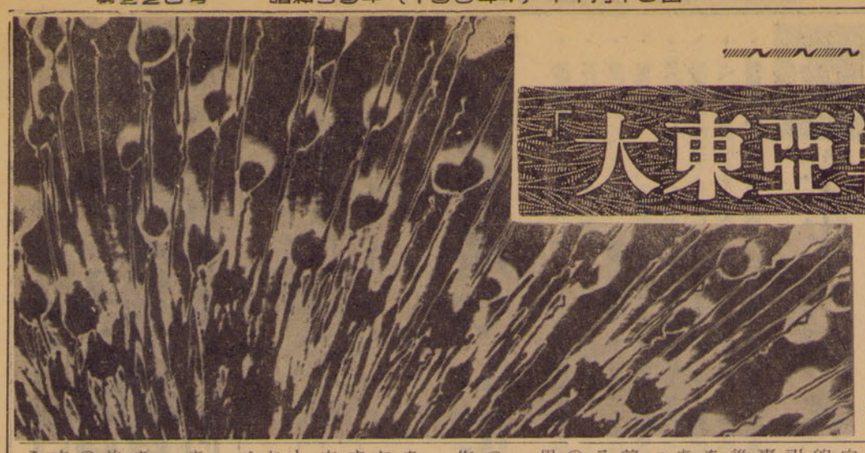
研究社の英語雑誌
英語研究 12月号 ¥100
The STUDY of ENGLISH
〔随筆二題〕『アメリカの芸術』（J. F. ケネデイ）『モスクワ再訪』（J. ベバン）
『懸賞論文入選発表』応募『懸賞論文と読書』
■戦後の沙翁劇映画▽新高等英語講座（解釈・文法・作文・実用英語）▽東京五輪を米特派員にきく▽映画『若い恋人たち』▽アメリカ語法覚え書▽英国の国会議事堂
生きた米英語の解明に！　12月号 ¥120
時事英語研究
アメリカ短編小説作家論（オハラからサリンジャーまで）映画シナリオ「セパレートベッド」オリンピック選手の印象（宇野尚志）街で見た英語の実態（クリスマスカードと絵葉書）商業英語検定試験の結果（中内正利）英語街漫歩（奥平光）新語展望
東京都千代田区富士見町二ノ一　研究社　全国書店発売中

現代思潮社 東京都文京区春日1—6 振替口座・東京72442番
ルネ・カナック／佐々木孝次訳
ネチャーエフ
ニヒリズムからテロリズムへ■ドストエフスキーの名作『悪霊』のモデルとして知られながら謎のヴェールに包まれてきた若き陰謀家ネチャーエフの生涯をいきいきと描いてロシア革命運動史の〈影の地帯〉に初めて照明をあてたヒューマン・ドキュメント■480円
■大杉栄全集＝全14巻
①青年に訴う　⑥労働運動論集
②無政府主義の哲学Ⅰ　⑦ロシア革命論
③無政府主義の哲学Ⅱ　⑧一革命家の思い出Ⅰ　⑫自叙伝
④クロポトキン研究　⑨一革命家の思い出Ⅱ　⑬日本脱出記・獄中記
⑤相互扶助論（翻訳）　⑩人生について
■既刊太字／呈総目録
■各四六判／600円
大杉栄全集第5巻
文藝論集
第9回配本■政治と学論争の先駆ともいうべき大正期の民衆芸術論巻に重要な一石を投じた「新しき世界のための新しき芸術」をはじめ、社会問題と芸術問題のあいだを鋭く衝いた文芸評論家・大杉栄の多彩なエッセイ・作家論・詩と感想などを収録する■600円
大杉栄全集第11巻
民衆藝術論
第10回配本■大革命以降のフランスにおける民衆運動の諸動部を民衆芸術創造の論理に定式化して大杉栄の文芸思想確立に深甚な影響を与えたロマン・ローランの古典的労作『民衆芸術論』の完訳復刻版。第II部に仏・露その他の翻訳小説II篇を併録する■600円

人間形成の原典・名著の完訳決定版—
世界の大思想
全29巻・各巻六三〇円
責任編集＝務台理作　田中美知太郎　高島善哉　松浪信三郎
装幀＝亀倉雄策
五大特色
1 世界思想の真の最高峰のみを厳選
2 大作完訳を根本方針とする決定版
3 永く模範となる正確で平明な訳文
4 学界の最高水準を示す懇切な解説
5 書架に重量感をもたらす豪華造本
★四六判／三色豪華美麗函入／平均四五〇頁
先哲の思索を——東大総長　大河内一男
解説書やダイジェストで間に合わせる風潮が強いのは困りものだし、それを要領よく覚え込むことを教養と思い違えている傾向がある。いきなり原典と取り組む気魄がほしい。そして「自分の頭」で先哲の思索の意義を考えることである
第二回配本・11月30日発売！
資本論2
長谷部文雄訳
エンゲルス編
原版権所有青木書店
解説＝宇高基輔（「資本論の理論的構成」）
こんなに安く美しい『資本論』が発行されるのは日本で初めてのこと。美しく堅固な装幀は、学習者、研究者の愛蔵本として長く書架を飾るにふさわしいものです。これを機会にまだ読んでいない人、持っていない人はぜひお備えください。
資本論1（第一部全）資本論2（第二部全）
資本論3（第三部上）資本論4（第三部下）
●全巻四分冊に収録・毎月一冊配本
●カタログの二請求は書店または本社へ
東京神田小川町三の八　振替東京一〇八三〇三　河出書房

林房雄氏の所論を検討する

「大東亞戦争肯定論」をめぐって



戦後二十年を経過したいま、安保闘争の敗北によって音を立てて崩壊した八反体制〉隠蔽の戦後価値体系の、その後にひきつづく深層部分までに及ぶ分裂と混迷という情況のなかで、苦渋な思想的営為をつづけながらも、いまだにその敗走をチェックする有効な思想をつくり出しえないままに、すでにその弱体化を見越し圧倒的優勢を誇る体制側によって太平洋戦争への直接反動であった〝戦後〟そのものをいっきょになしくずしにし、虚妄の「民主主義」による「大国」日本を再び〝東亜共栄圏〟のなかに築きあげようとする攻勢がかけられている。そして、そのお先棒をかつぐように、林房雄氏「大東亜戦争肯定論」へ中央公論連載〉なる拙劣な挑発の笛を吹き鳴らす。いまわれわれはそ笛にのって、さては〝軍国主義の復活〟などと機械的、感情的にさわぎたてることではなくして、また、そんな愚劣なものには目もくれずと避けて通ることでもなくして、こうしたものが〝おめずおくせず〟横行している現実こそみつめなければならないだろう。

――編集部――

戦後の思想史のなかで、林房雄氏の大東亜戦争肯定論をどう位置づけるかというのが問題であるようである。「ようである」という曖昧な言い方をするのは、私が実のところ、わが国に思想史などというものがはたしてあるのだろうか、と心の奥深いところで疑っているからだ。「昨日は遠い昔となり、遠い昔が今となる」（高村光太郎「真珠湾の日」）のが我が国特有の思想年理だということは、すでにくり返し指摘されてきた。思想の持続追求、つみ重ねられた伝統との対話を通しての発展という現象がなければ、思想史などと呼べるのは本来、存立のしようがない。ありうるのは、せいぜい思想の変遷ないし思想絵巻であるにすぎない。そして戦後の思想絵巻は、さらに別の次元を加えたようである。すなわち、「論壇」と呼ばれるところの商業的舞台の発展とその観客の大衆化である。かつて総合雑誌と呼ばれる舞台の興業師は、「時勢」に敏感に反応しながら、あちこちの「職業思想家」にお膳立をかけ、毎月、目先の変った「論」をきそって提供する。論壇からお膳立がかかるのを待っている「思想家」は、したがって、一芸に秀でる――いや持論というものをいつも売り込んで登録しておく必要があるのだ。かくて「論争」というものが、これらの「思想家」の間で華やかに仕立てあげられる。それらがいかにつねに実りなく、まったくそのエリートたちが、いかにひとの意見に学ばないことに励みであることか――「論壇」がこのようにして作られるものであるなら、観客大衆がいいかげんのところで、みきりをつけ「卒業」してしまうことになっても、あまり文句もいえない。

しかし、「論壇」は卒業できても、思想は卒業できるものではない。そして「論壇」の流行絵巻などというところに、必らずしも日本の真の思想的営為が繰り拡げられているのではないということを、われわれは肝に銘じるべきである。

回り舞台スポット・ライトを浴びるスターの群像だけは、思想史というよりも、むしろ日本の政治社会史あるいはジャーナリズム史のファクターとして考えた方がよいのだ。とはいえ、このような回り舞台によってしか、日本の知識予備軍つまり学生たちが、現代の思想史に接する機会が一般にないというのは怒るべきことであると私は感じる。最近の中央公論編の戦後思想史などは、この感をさらに深くさせた。近代日本がもつすぐれた思想史的遺産や、古典に学生が近づく道は、ほとんど皆無に近づくべきである。もちろん、思想は、本来的に自問さるべきものである。とはいえ、その最低の条件も充たされていないとすれば、日本において一般に思想が「意匠」以上のものたりえないのも、また必然ではないだろうか。

× × ×

林房雄氏の所論は、まさに私にこんな前置きを書かないでは気がすませない種類のものである。それは、彼が大正の末年、志賀義雄らと共に共産党の機関誌「マルクス主義」を編集していた「後藤寿夫」時代から次第に転向し、昭和十五年「転向について」を書き、また「勤皇の心」を書いて戦争時代の公認教理のイデオローグになったときの論理から、基本的には寸分違うことがない。敗戦から今日までの日本が経たあらゆる体験は、占領軍によって、追放され、その間ホーム小説や好色小説を書いて世を過していた氏には、もう一つ別な日本のことがらであり、敗戦後二十年間の日本の民主主義についての苦悩とあらゆる論議はうたかたの如く消え去った虚妄としてしか感じられていないのである。戦後の思想的著作、たとえば丸山真男氏などに氏が接するときひとたび丸山氏の著作を虚心に読んだものには直ちに明らかだが、自分の論理の枠のなかだけで一方的に相手を釣り取ってくるその強引さ加減は、「何事も学ばず、何事も忘れず」というフランス革命後に復帰した伯爵族たちへの批評を、そのまま思い出させるほどである。昭和二四年、追放解除になった氏は、「秋晴れや、冨士に戦前戦後なく」と詠じた。その氏がそのイデオロギーが、今日の日本のジャーナリズムの上で、いま「思い出」されているのである。

氏の理解のいい加減さ、理論のつじつまの合わなさについては、佐藤氏が別文で克明に論じよう。

しかし、いやしくも思想の問題を扱うものは、対象の最も本質的な分部と思われるところに視座をすえて取り組むのが、フェアーなやり方である。たとえ林氏がそうしなくてもわれわれはそうしなければならない。知性が真に対決すべきものは何某氏の理論ではなく一つの理論、一つの思想だからである。

林氏の所論の首尾一貫した思想を捨おうとするなら、それは、明治維新から敗戦に至るまでの日本の発展は、欧米先進国の外圧に抗する民族のたたかいであったということ――これが氏のいう大東亜百年戦争である）、このたたかいはまた、欧米の帝国主義的植民主義に抗するアジア解放戦争の意味をもつものであり、すなわち「自足」すべきであるということ、しかし現在の日本は敗戦でその使命を終えたのだから、安らかに憩うべきであるということ、以上につきるだろう。だから、問題をこの基本的主張に沿いつつ、戦後思想との関連で考えることにしよう。

× × ×

林氏が懸命に力説しているところの明治維新から敗戦に至るまでのわが国の政治を貫く基本的方向がナショナリズムであったという命題は、それを肯定する否定するという問題を別にすれば、戦前戦後を問わぬ常識であるにすぎない。戦前の日本において、天皇制国家に対し辛ふる個人の自由とか民族の使命という考え方が、一般的に無かったことを否定する主張はないわけで、まさに丸山真男氏がいうように、「日本人全部が右翼」だったのである。だから問題は、この「意識」と「運動」における差国一致のナショナリズムがその実質において何であったか、またわれわれはそれをどのように意味づけるのかということにかかってくる。

今からふり返るならば、敗戦直後のこの問への対応のいいかげんさが、林房雄氏の復活と密接に結びついていることが、痛切に自覚されてくる。占領軍と既成政党（保守党も社会党もふくめて）、そして日本の各社会組織のほとんどが、このナショナリズムを分割して限定にとらえた。「悪く」なったのは昭和二十年、いや十二年、あるいは年以後であり、その原因は軍部にすべてが帰された。責任の追求は、その範囲に止まり、いや、それ以上に進めえなかった。また「悪かった」という判断は、人道とか平和あるいは民主主義とかいう理念の名において、なされたが、しかし、それは同時に、戦勝国への卑頭であり、決して、国民が発奮して自覚していた価値感覚に基づくものではなかったのである。

この形での「終戦処理」の両翼に、「一億総ザンゲ論」と、共産党からの戦争責任追求論がある。宮様内閣が国民に宣言したこの「一億総ザンゲ」の宣言は、戦争体制が「悪い」というなら、国民すべてが断罪されなければならないという、当然の論理の帰結であり、共産党の意識の軽蔑の追求も、占領軍＝解放軍という価値基準のもとっての、「被害者」である彼らを除外した「一億総懺悔」の宣言であった。だが、同時にこのとき、この両者において共に、自身の集団内部における責任追求の論理が消え去っていた。そこでは共に、集団あるいは社会の目標と行動は、そのなかで人間の自覚的作業であるというよりは、すでに定まったものとしてあるという意味においてであるかということであるにすぎない。そして林氏の思想におけるナショナリズムは、明らかに、程度において無限定で、かつその意味づけは、アジア解放史観とでもいうべきものにのっとっている。

もっとも、この意味づけには、いくつかのわざとらしい虚偽がふくまれている。かつての林氏にはもう一つ皇国史観がその上にのっかっており、アジアの解放＝八紘一宇、日本の皇道宣布の下での西欧とのたたかいであったはずである。「今日のたたかいであったはずである東亜戦争のもたらしたもの」という、くり返されるスローガンは、「大東亜戦争において日本が敗退し、いたために」というたし書きをつけなければ、林氏においても意味をなさない。そうでなかったら、日本が明治以来、朝鮮あるいは中国に対してなしてきたことは、いったいなにであるのか。さらに、林氏は、今日の中国は、欧米とアジアとの闘争において、かつてこの日本の使命を継承しているという。とすれば、かりに、中国がかつての日本のなしたと同様に、しかもアメリカ軍事基地化している日本に対してそれ以上の充分の理由をもって、日本に攻め込んできても、それを「肯定」しなければならないのだろう。だが、氏は数年まえ、「共産軍とは、アメリカといっしょになってたたかう」と宣言した「皇子の青春」ばかりなのである。

「ナショナリズムの閉塞」は、まさにこの領域にかかわっての問題であった。それが民族としての「意味づけ」の問題にかかわるかぎり、国民にとって外国製と感じられる国家の「理念」は、本来、ナンセンスな側面をもっていた。と同時に、たんに先進国の路線を追う後進国としてのナショナリズムは、「高度成長」から「革命路線」に至るまで、それ自体、「頭打ち」の理念なのである。

「終戦処理」の段階以後、わが国にようやく、「敗戦」をふまえて日本のナショナリズムを自覚的に再建しようという動きが発生した。たとえば、「主体性論争」にはじまり、近代日本における「精神構造」のあり方の追求、「転向論」から、安保闘争後の「自立主義」に至るまでの過程は、政治における「リーダーシップ」の「ありかた」、民衆の「姿勢」の問題に迫ることによって、ナショナリズムが構成される「方法」、国民社会における自覚機構への「手つづき」の問題に迫ろうとしたものと考えることができる。

これらは、すべて、今日において、ナショナリズムの問題を扱おうとするものが、ふまえるべき貴重な遺産である。そこには、根本的に、われわれが新たなナショナリズムをもたなければならない、だが同時代に、それは「開かれた」ものでなければならないという共通の認識が流れている。つまり、国民の、なかから内発的に発し、しかもなおかつ、無限定に国民生活や国際社会をのみつくすものであってはならないという、歴史の教訓からの綿密な自覚なのである。

他方では、「国民文学論」にはじまり、柳田学の再評価、明治維新の再評価に至る動きは、日本社会における統一的エートスを掘り起こしてゆくことによって、ナショナリズム構成に際しての「目標」に、国民社会における目標樹立が終日すべき「内容」の問題に迫ろうとしたものと考えることができる。

これらの、すべて、今日における「ナショナリズム」の問題は、「国家」を、「運動」を、「集団」を同様に意味づけて肯定しようという心理と同質のものである。それらによって、与えられた「客観的意味」の栄光のなかで、はじめて心の安らぎをえようという精神の卑小さ、あるいは生者の自己偽瞞に、それは端を発する。

人間がある状況のなかで果たしている役割についての意味は、もういちどそれぞれの人間のなかで自己の生との連関において自覚的に問われ直さねばならないということについての、戦後思想や運動の著積は、未だ充分ではないようである。

日本は早ですでにその歴史的使命を終えたという林氏の思想は、小春日和に冬空を送ろうという老人の生涯についての自己肯定心理には即してはいても、若もののものではありえない。あるいは、「老い易い世代」の挫折センチメンタリズムの子守唄ではあっても、これからの日本を切りひらこうという不屈の青春のものではない。過去の日本をどのような形で否定し、そのうえにどのような新たなヴィジョンを築くかは、まさに、われわれの負うべき課題なのである。

（筆者、たかはたけ・みちとし氏は本学法学部助教授）

「啓蒙史学」への反逆と依存

「啓蒙」の時代はいっぱん反歴史的である。「フランス革命は眠っている人間が彼を抑えていた夢魔を払いのけるように、決定的に過去に背を向けた」（グーチ）「文明開化」と「旧弊打破」と富国強兵とが高唱されていた明治初年に来日したベルツは、日本の歴史を知ろうとしたとき、「われわれには歴史はありません、われわれの歴史はゆかりっと始まるのです」と叫ばざるをえなかった。そして、第二次大戦後の「民主花」の時代にも、前代――とくに「太平洋戦争」期は「暗黒時代」としていっぱんにえがかれたのである。窮乏と危険と抑圧とになる戦争体験の国民的な規模での生々しい記憶が、この「暗黒」イメイジの普及をささえていたことはいうまでもない。

ところで、自分の行為になんらかの「意味」を認めたいというドラマティックに撞布したのが、中央公論に連載中の林房雄の「大東亜戦争肯定論」（一部分本年刊行。以下本書からの引用はページ数のみを記す）である。

その刺激的な題名にもかかわらず、林氏は戦争そのものを正面から支持しているわけではけっしてない。氏は、「戦争はどの国かとのような名義で行っても犯罪行為だ」（中央公論・六四年八月号・P.155）、「いかなる理性的判断と努力によっても他の道を選ぶことが不可能であった」（P・196、傍点原文）というわけである。人為を超絶した「宿命」にたいして人間は責任をとりえない。かくして近代日本においては、戦争責任はそもそも存在しえないことになる。しかも戦争が「無謀」であればあるほど、すなわち普通の意味では無責任に開始されればされるほど、その戦争は「非壮」味をおびし、したがって「宿命」視される。この無責任な「非壮の美学」が、林氏の創造したものであり、そのうえ、戦前の日本にひろく普及していたものであり、その自己実現的な発展が「太平洋戦争への道」を準備した二つの要素であったことは、あらためて指摘するまでもないであろう。

以上は主としていわば消極的な責の論理であったが林氏はさらに積極的な「肯定論」をも展開する。すなわち、「百年戦争」が「西洋への抵抗」である以上、それはあくまで「（西洋的な）植民主義、征服主義から脱出するための努力であり、奮闘であった。」（X.P.137）そのことは、西郷隆盛から石原莞爾にいたるいわゆる「右翼」的な思想家・行動家達が（後述するように、林氏によれば彼等こそが「百年戦争」の推進者であった）心情的にいだいていた「東洋解放」の「理想」によって、ひろく、日本戦争の「目的」であったとされている。

「暗黒時代」の「暗黒」の時代になろうと明らかにされていたのが、自分を「被害者」にするかまたは「馬鹿者」にするかの二つの方式である。前者からは「加害者」への憎悪と警戒心とが、また後者からは悔恨と新生への決意とが、「歴史の教訓」として、それぞれみちびきだされる。

そしてこの問題によっては戦争期の自分の生活体験が整理しつくされないとき、その残滓は歴史的な「啓蒙主義」への「うらみ」として蓄積されていったのである。

この「うらみ」の放出は、「啓蒙」の時代のたそがれとともに、闇歴的におこなわれてきたが（たとえば竹山道雄『昭和の精神史』）年月の経過と経済復興とによる戦争の悲惨な記憶の逓減、戦争未体験者の増大、さらに体制側による「愛国心」作興運動の展開等、状況のおおきな変化を背景として、「うらみ」をもっともドラマティックに撞布したのが、中央公論に連載中の林房雄の「大東亜戦争肯定論」（一部分本年刊行。以下本書からの引用はページ数のみを記す）である。

その刺激的な題名にもかかわらず、林氏は戦争そのものを正面から支持しているわけではけっしてない。氏は、「戦争はどの国かとのような名義で行っても犯罪行為だ」（中央公論・六四年八月号・P.155）、「いかなる理性的判断と努力によっても他の道を選ぶことが不可能であった」（P・196、傍点原文）というわけである。人為を超絶した「宿命」にたいして人間は責任をとりえない。かくして近代日本においては、戦争責任はそもそも存在しえないことになる。しかも戦争が「無謀」であればあるほど、すなわち普通の意味では無責任に開始されればされるほど、その戦争は「非壮」味をおびし、したがって「宿命」視される。この無責任な「非壮の美学」が、林氏の創造したものであり、そのうえ、戦前の日本にひろく普及していたものであり、その自己実現的な発展が「太平洋戦争への道」を準備した二つの要素であったことは、あらためて指摘するまでもないであろう。

以上は主としていわば消極的な責の論理であったが林氏はさらに積極的な「肯定論」をも展開する。すなわち、「百年戦争」が「西洋への抵抗」である以上、それはあくまで「（西洋的な）植民主義、征服主義から脱出するための努力であり、奮闘であった。」（X.P.137）そのことは、西郷隆盛から石原莞爾にいたるいわゆる「右翼」的な思想家・行動家達が（後述するように、林氏によれば彼等こそが「百年戦争」の推進者であった）心情的にいだいていた「東洋解放」の「理想」によって、まず明治維新や日露戦争が植民地解放運動に刺激をあたえ、「太平洋戦争」の後に東洋の植民地が相ついで独立したという結果的事実によって、証明されているというのである。

「啓蒙史学」による日本歴史の「歪曲」に抗議して、林氏は「あったがまま」の歴史叙述を主張し、「大東亜戦争肯定論」において自らそれを実践したと述べている（P. 262）。しかし前述のような論理構造をもつ林氏の主張は、はたして史実の検証にたえうるものであろうか。日本の近代史について、多少でも知識をもっている者ならば、すべて多くの疑問が浮かんでくるであろう。たとえば……

幕国併合は「東洋解放」の理想と矛盾する西洋的「植民主義・征服主義」の模倣ではないのか（けんに、林氏の尊敬する樽井藤吉や内田良平等は、征服的な「幕国併合」に反対して、相互による平等な立場を保障するような「日幕合邦」を主張した）。これにたいして林氏は、「この百年間に、台湾と朝鮮半島とカラフトの南半と南洋の諸粒島のおこぼれを負わしたからといって、どこが帝国主義であるか。」（P. 194）といなおるのみである。

近代日本がおこなった数多くの戦争は、すべて西洋にたいする「やむにやまれぬ抵抗戦争」のみだったのか。欧米列強と連合して清国を攻撃した北清事変は？「欧州動乱」という「千載一遇の好機」を火事場泥棒的に利用して「東洋にたいする日本の利権を確立」しようと試みた第二次大戦への参戦および中国への二十一箇条の要求は？ロシア革命への干渉（しかもふたたび欧米列強と協力して！）とシベリアの占領を意図しておこなわれたシベリア出兵は？中国革命の進展＝国民政府による中国全土の統一を阻止すべく三回にわたっておこなわれた山東出兵は？満州事変ないし十五年におよぶ中国との（欧米列強とのではなく）戦争は？ナチス・ドイツの一時的勝利という「好機」をふたたび火事泥的に利用したインドシナ半島への進出は？……これらすべては、西洋に対抗すべく西洋を（しばしばより醜悪に）模倣した近代日本の矛盾の表現ではないのか。林氏は「西洋への対抗」の面だけを一方的に強調し、日本自身が「醜悪」な「西洋」化していた面を無視しているわけではない。もちろん、林氏はこれらの事実をまったく無視しているわけではない。日本は欧米列強にしかけたわけではなかった。日中戦争の「泥沼」におちこんでしまったのだといった強弁を試みながら（III. P. 118.）

（一面〈つづく〉）

史実の一方的な取捨 選択に基づく「史論」

佐藤誠三郎

「大東亜戦争肯定論」と戦後思想

「開かれた」ナショナリズムの再建を

高畠通敏

「ナショナリズムの閉塞」は、まさにこの領域にかかわっての問題であった。それが民族としての「意味づけ」の問題にかかわるかぎり、国民にとって外国製と感じられる国家の「理念」は、本来、ナンセンスな側面をもっていた。と同時に、たんに先進国の路線を追う後進国としてのナショナリズムは、「高度成長」から「革命路線」に至るまで、それ自体、「頭打ち」の理念なのである。

「終戦処理」の段階以後、わが国にようやく、「敗戦」をふまえて日本のナショナリズムを自覚的に再建しようという動きが発生した。たとえば、「主体性論争」にはじまり、近代日本における「精神構造」のあり方の追求、「転向論」から、安保闘争後の「自立主義」に至るまでの過程は、政治における「リーダーシップ」の「ありかた」、民衆の「姿勢」の問題に迫ることによって、ナショナリズムが構成される「方法」、国民社会における自覚機構への「手つづき」の問題に迫ろうとしたものと考えることができる。

これらは、すべて、今日において、ナショナリズムの問題を扱おうとするものが、ふまえるべき貴重な遺産である。そこには、根本的に、われわれが新たなナショナリズムをもたなければならない、だが同時代に、それは「開かれた」ものでなければならないという共通の認識が流れている。つまり、国民の、なかから内発的に発し、しかもなおかつ、無限定に国民生活や国際社会をのみつくすものであってはならないという、歴史の教訓からの綿密な自覚なのである。

他方では、「国民文学論」にはじまり、柳田学の再評価、明治維新の再評価に至る動きは、日本社会における統一的エートスを掘り起こしてゆくことによって、ナショナリズム構成に際しての「目標」に、国民社会における目標樹立が終日すべき「内容」の問題に迫ろうとしたものと考えることができる。

これらは、すべて、今日における「ナショナリズム」の問題を扱おうとするものが、ふまえるべき貴重な遺産である。そこには、根本的に、われわれが新たなナショナリズムをもたなければならない、だが同時代に、それは「開かれた」ものでなければならないという共通の認識が流れている。つまり、国民の、なかから内発的に発し、しかもなおかつ、無限定に国民生活や国際社会をのみつくすものであってはならないという、歴史の教訓からの綿密な自覚なのである。

他方では、「国民文学論」にはじまり、柳田学の再評価、明治維新の再評価に至る動きは、日本社会における統一的エートスを掘り起こしてゆくことによって、ナショナリズム構成に際しての「目標」に、国民社会における目標樹立が終日すべき「内容」の問題に迫ろうとしたものと考えることができる。

これらは、すべて、今日における「ナショナリズム」の問題を扱おうとするものが、ふまえるべき貴重な遺産である。そこには、根本的に、われわれが新たなナショナリズムをもたなければならない、だが同時代に、それは「開かれた」ものでなければならないという共通の認識が流れている。つまり、国民の、なかから内発的に発し、しかもなおかつ、無限定に国民生活や国際社会をのみつくすものであってはならないという、歴史の教訓からの綿密な自覚なのである。

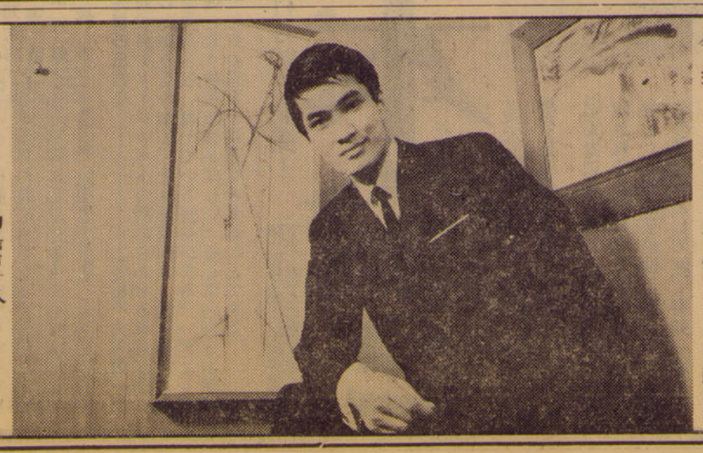
ポータブル タイプライター
クリスマス 特別セール
お心のこもったクリスマスプレゼントに
本紙をご持参の方に特別価格でご提供いたします
スミス・コロナ（アメリカ製）¥45,000（定価¥55,000）
ファシット（スウェーデン製）¥39,500（定価¥45,000）
オリンピア（ドイツ製）¥28,000（景品贈呈）
割引期間：12月30日まで（品切れの節はおゆるし下さい）
営業時間：9.00a.m.～7.00p.m.（月～土）
9.00a.m.～5.30p.m.（日）
近代事務機 製造・輸出・輸入
クロサワ
ギンザ 6丁目角 571－8441
MODERN OFFICE MACHINES KUROSAWA

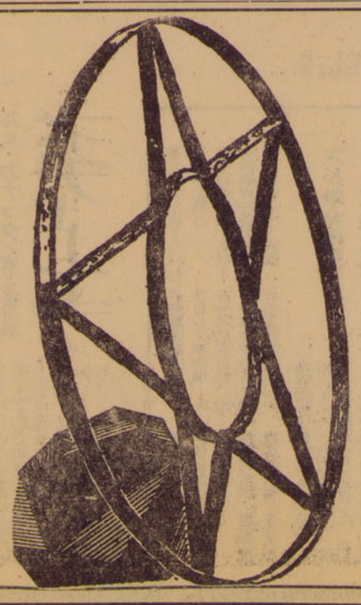
電化製品
トケイ・カメラ
アクセサリー
スポーツ用品
10ヶ月払い
Futaba
ŌJI — ŌMIYA

■冷暖房完備■
巴里院ダンス教授所
都内最低の教授料
（学割有り）
高田馬場本店国電高田馬場駅前新宿寄り
TEL 361 1374

登録商標
元祖 餃子會舘
（池袋）南口東上線改札口前支店971 4985
（新宿）歌舞伎町西武新宿駅前本店 368 6603
（新宿）歌舞伎町西武新宿駅前支店 371 4369
（新宿）スケートリンク横味の街支店368 5491
（新宿）紀伊国屋ビル地階支店（352）1806

英会話
▲教師陣は教養ある外人のみ
▲個人教授から最高6人迄の小級制
▲9年の長い教授経験を有します
▲入学は随時です
▲録音室、冷暖房完備
アイ・エス・スタジオ
池袋東口三井銀行横 Tel 971－2450


taka-Q
西口本店・追分店・中央口店
西口会館店・新宿駅ビル店
〈新宿〉紳士服の高久
今月中はカメラが当る！
若いあなたの個性にふさわしいヤングエクゼクティブを中心に、'65年紳士服の新しい方向をきめるオリジナルスーツをそろえました。
taka－Qの オリジナル'65プレゼントセール 期間中（11月1日～30日）はお買上げ5000円ごとに抽せんでリコーオートハーフをプレゼント！


最良の品質
安定せる販路
良き伝統
取締役社長 萩原吉太郎
北海道炭砿汽船株式会社
本店 東京都中央区日本橋室町2の1（三井三号館）
営業所 札幌・仙台・名古屋・大阪
鉱業所 夕張・平和・幌内